ふるさと紀行

「火の国発祥の地」

宮原町

『釈日本紀・八代郡誌』の中には、「火の国」の由来に関する物語が残されている。

その昔、第十代崇神天皇が益城の賊を退治された時のこと。味方の健緒組が、野宿していた八代郡白髪山で、山を下っていく〝火〟を見た。このことを聞かれた天皇は、「火が下りていった国だから、火の国と呼べ。」と言われたという。この怪火の下りていったのが八代の辺り。おそらく、火打ち石のとれる「火の川」（氷川）の流れる宮原地方ではなかっただろうか。

今寺の十一面観音

▶立神峡
昭和59年から始まった整備事業。遊歩道・駐車場も完備され、この秋にはつり橋の架設も…。

歴史の香りに包まれて

町の中を抜けて山手の方、農家の路地をつきあたった所に古いお堂がたたずんでいる。鍵のかかっていない観音扉を開けると、今寺の十一面観音が姿を現わす。言葉に尽くせない表情。この観音様はいつの頃からか乳守り観音と呼ばれている。お乳の出ない母親が、この観音様にお参りすると、たちどころにお乳が出るようになるという。御座の下には、晒しで作った乳房が奉納されており、赤ん坊をもつ母親たちの思いがひしひしと伝わってくる。今寺の人達は、毎日の清掃作業などを通して、今も変わらぬ信仰でこの観音様を守り続けている。

古代、宮原町は八代地方の文化の中心であった。それを物語るように、ここにはさまざまな伝承をもつ場所が多い。他にも、馬原古墳第三号、大王山古墳群など古代の遺跡、神社や石塔。道の辺には神仏像が点在する。静かなたたずまいの中、宮原町は歴史と文化を感じさせてくれる。

五木・五家荘県立公園の入口「立神峡」

町の中ほどを走る道を、五木方面の山々に向って車を走らせる。いくらも走らないうちに川岸の木々の間から豊かな緑に縁どられた断崖絶壁の岩肌が覗き始めた。五木・五家荘県立公園の玄関口、「立神峡」。急な坂を下って川原に降り立つ。目の前の対岸に高さ七五メートルの石灰岩の絶壁が迫る。黒土に覆われた地形の中、この絶壁の辺りだけが石灰岩。黒灰色の岩肌に所々白い筋が入っており、雄々しく壮麗である。

ここは、夏になると、隣接地区の人や里帰りしてきた人などでいっぱいになり、一大避暑地に変わる。水辺は子供達の元気な笑い声と多くのボートで賑わう。川底から湧く水は澄んで、少し冷たい。断崖を囲む木々が強い日差しを遮り、集まる人々に休息の場を与えてくれる。

川岸を離れ、下宮熊野座神社を抜けて遊歩道を歩き始める。絶壁の頂上に向って登る道は、けっこう勾配がきつく、うっすらと汗がにじんでくる。深い木々に囲まれてゆっくり歩いていると、ふいに羅漢さんが顔を覗かせた。新しい羅漢さんだ。静かに微笑む顔。大きく笑う顔。ユーモラスで豊かな表情たち。その表情を追いながら、誘われるように先へ先へと足が進む。この羅漢像、立神峡の名物にと五百体を目指して町民が寄贈したもの。台座の部分には、赤い文字で寄贈した人の名前が刻まれている。家族五人の名前があったり、孫と祖父母の名前があったり。結婚の記念にだろうか、夫婦の名前もあった。それぞれの人がそれぞれの思いで立てた羅漢像。木漏れ日の中、静かに笑っている。そんな羅漢さんを眺めながら歩くと、気持ちが自然の中に溶けこんでいく…。

▲五百羅漢
寄贈の申し込みについては、宮原町観光協会（0965-62-2311）へお問い合わせ下さい。

そして、新しい風は吹き始めた。

立神峡に向う道沿いを走る用水路。きれいな水の中を悠々と泳ぐ鯉の群れ。この用水路には、一八〇〇匹もの鯉が放されている。

群れを成して泳ぐ色とりどりの鯉の姿は、とても優美。時を忘れて見つめていたくなる。薩摩の島津氏が参勤交代で通ったという薩摩街道へも用水路を引き、鯉を放流するという計画も進んでいる。

宮原町には陶芸、木の工芸など、県の伝統工芸士の指定を受けた四人の制作者が住んでいる。彼らは年一回合同個展「四人展」を開く。自分の持つ技術に他の分野の工芸技術をプラスして、新しい特産品を開発しようというのだ。彼らの活動は、町内の他の製造業者に広がり、〝宮原町だけの物産〟を作ろうと、「宮原町物産振興協会」が設立された。

「商工会青年部による鯉の放流など、町にどんどんいろんな〝兆し〟がでています。ハングリー精神のある若い力が大きく実を結ぼうとしているんです。」物産振興協会のメンバーの一人が語った言葉が印象的だった。

町制一〇〇周年。宮原町の新しい出発は、もう始まっている。

用水路に放流された鯉